

『今月の天候と農作業』

通巻第5667号

9月号

令和4年9月1日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。

<1 週目の予報> 9月3日(土)～ 9月9日(金)

台風第11号や湿った空気の影響で曇りや雨の降る日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 9月10日(土)～ 9月16日(金)

気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から4 週目の予報> 9月17日(土)～ 9月30日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆ 普通期水稻

1 水管理

根の活力を維持し、登熟を向上させるために、収穫の5日前までは、間断かん水を続けます。特に、高温時には飽水管理や夜間の通水が有効です。なお、台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後は、吹き返しの高温乾燥風による品質低下防止のために、湛水管理を行いましょう。

2 病害虫防除

穂いもちやトビイロウンカの発生に注意します。トビイロウンカについては、カメムシ類との同時防除で、穂揃期とその7～10日後の2回防除を必ず実施しましょう。また、ほ場での発生が多い場合には、臨機防除を行いましょう。

3 収穫

収穫適期の目安は籾全体の約8割が黄化した頃です。高温での急激な乾燥は、食味や品質が低下するので注意します。玄米水分は仕上げ水分14.6～15.0%を目標に乾燥を行いましょう。

◆ 大豆

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシ類の防除を行います。ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の防除効果が劣るため、定期的にはほ場を観察し、早めに防除を行いましょう。

◆ そば

1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間滞水や冠水すると生育不良や立枯れが発生します。排水溝を設けるとともに、生育期間中も排水を徹底しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

施設野菜ではきゅうり、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。適期に定植し、スムーズに活着させることが最も重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行いましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制裁培の定植期です。定植後から収穫開始期までの管理で草姿は決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に上げることが、収量・品質向上につながるため、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢を調節しましょう。

◆ピーマン

接ぎ木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向があります。台木の特徴を把

握して、定植後から収穫開始時期までかん水量を2～3割増やすなど草勢を強めに保ちましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となります。セル苗を2次育苗せず、直接定植するダイレクトセル苗定植を利用する場合、異常茎（メガネ茎）の発生を抑えるために、定植後のかん水量を制限する管理が行われていますが、極端なかん水制限は初期生育に悪影響を及ぼすため、少量のかん水で回数を多く施用するようにしましょう。

◆いちご

「さがほのか」は、花芽分化に対する葉柄中の窒素濃度や苗令の影響等が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃のため、その2～3日前から花芽検鏡を行い、花芽が分化していることを確認して、9月中旬以降に定植します。

（吉山 健二）

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の播種・定植

9月はほうれんそう、だいこん、水田ごぼう、にんじん等の播種や、キャベツ、はくさい等の定植期です。排水が良く、肥沃なほ場を選び、播種や定植時には適度なかん水を行い、発芽揃いや活着を促します。また、生育初期の害虫や雑草対策として粒剤や除草剤の散布が重要ですが、土壌が乾燥するといずれも効果が劣るため、適度なかん水はその対策にもなります。

播種、定植後は、台風等の大雨対策として、明きよを設置しましょう。

◆にんじん

8月播種分は間引きの時期です。株間は8cmを目安に間引きます。干ばつや高温による発芽不良や大雨による土壌や種子の流失、土壌表面の硬化で欠株が多い場合は、9月20日頃までに撒きなおしましょう。

◆ほうれんそう

下旬からが播種適期です。排水が良い、肥沃なほ場を選び、土壌診断によりpH7を目標に石灰資材を施用します。

昨年秋から、べと病の発生が多くなっているため、予防防除を行きましょう。

◆だいこん

播種は9月上旬から下旬を目安に行い、10月中旬以降になる場合はマルチ栽培とします。また、ホウ素が欠乏すると黒芯が発生するため、土壌診断を行い、基肥にホウ素入り肥料を施用しましょう。

◆さといも・かんしょ等の収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害を次作で発生させないために、収穫終了後は残さを可能な限りほ場外に持ち出し、適正に処理します。持ち出せない残さは地温が15℃以上ある時期に耕うんで細かく破碎しましょう。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は着色や糖度などの出荷基準に基づいて行います。また今年のカメムシの飛来予測日が例年より早く、飛来量も多い見込みです。園地の観察により、早期発見・早期防除に努めます。特に台風通過後には注意しましょう。

マルチ栽培や根域制限栽培の園地では、近年、樹勢の低下が目立ちます。収穫後は速やかなマルチ除去や戻しかん水、窒素主体の施肥や葉面散布を行い樹勢回復に努めましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は開花期の気象条件等から、1番果の結果量はやや少なく、7月の結果が中心となっています。

9月に入ったら極小果、2果なりを中心に摘果を行います。肥大促進のためにも、9月末までに摘果を終了しましょう。

夜温が早く低下する中山間地域では、10月上旬のビニル被覆の準備を進めましょう。

◆ マンゴー

後期出荷作型園では、剪定直後からたっぷりとかん水を行い、高温管理や葉面散布により新梢の発生や伸長を促進しましょう。

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンは全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫は毎日行い、気温の低い早朝に収穫することで、果実温度を低く保ち鮮度保持を図ります。出荷前選別を徹底し、害虫による被害果等の混入を防ぎましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆秋ギク

10月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から4日間程度実施します。

なお、栽培地域や気候によって花芽発達速度が異なるため、事前に必ず花芽検鏡により発達ステージを確認し、再電照開始日を決めましょう。

◆スイートピー

前半は植え付け作業の最盛期です。

植え付け後1週間程度は乾燥しないように根締めのかん水を行い、その後は根の張りを良くするために徐々にかん水間隔を空けていきます。

また、植え付け後10日～2週間は遮熱効果の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候や時間帯に応じて適宜遮光を行いながら、徐々に光を当てる時間を増やしていきます。

◆デルフィニウム

沿海地域は年内出荷作型の定植期です。

高温による早期抽だい防止のために、定植前の遮光やかん水によりハウス内温度や地温を下げるとともに、定植後も必要に応じて遮光を行きましょう。

◆トルコギキョウ

沿海地域は年内から年明け出荷作型の定植期です。

定植直後に土壌の乾燥状態が続くと、ロゼット発生や切り花のボリューム不足につながるため、水管理には十分注意しましょう。

◆キイチゴ

秋出荷向けの腋芽や新芽が伸長し収穫期となります。樹勢維持及び来年度に向けた株養成のために3～4本程度は必ず残して収穫します。

また、定期的に病害虫防除を行きましょう。

◆ホオズキ

ウイルス病対策としてほ場の腐熟処理を行う場合は、カーバムナトリウム塩液剤等による古株枯死処理を行ってから株を持ち出します。

その後、堆肥や残さ分解促進資材を投入し、月1回程度の耕うんを繰り返して適湿な土壌水分管理とともに、土壌中に残った残さの分解を進めます。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

国内外において、鳥インフルエンザや豚熱等の発生が続いています。これらの法定伝染病から農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を行い、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

暑熱の影響により受胎成績の低下等が出てくる時期です。環境と飼養管理の両面から対策をとることで、家畜の体力の回復を図るようにしましょう。昼間は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かす等の暑熱対策を行いますが、夜間、急に気温が下がることがあるため、気温差で家畜が体調を崩さないように温度管理に気をつけましょう。

また、台風の襲来も予想されるため、畜舎の備え等、十分な事前対策が必要となります。

◆ 飼料作物

台風の影響により収穫が出来ないことが想定されるため、天候に注意しながら収穫作業を行い、良質な粗飼料の確保に努めましょう。また、極早生イタリアンや極早生エンバクの作付け時期です。計画的な作業を行いましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

これからの管理作業は、翌年の一番茶の収量と品質確保のために大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行いましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害(幹割れ・冬芽の凍害等)を受けやすくなりますので、中山間地域や寒害を受けやすい品種及び幼木等では9月上旬までに、それ以外は9月中旬までに、土壌診断結果を考慮し地域の施肥基準に準じて施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1～2tを施用し、軽く耕うんを行いましょう。更に、深耕を行うと発根が促進され、肥効率向上にもつながるため計画的に行います。但し、今年中切り更新した茶園の深耕は控えましょう。

2 病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。また、網もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期にはチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類の発生が多くなるため、茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 原基づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します(原基は20度前後で最もよくできます)ので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分な散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょう。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、風当たりの少ない暖かい方位(南～東南斜面)の、排水が良く、適度の湿度が確保でき、日光がチラチラ差し込む林内が適しています。散水施設のための水源が確保できれば、なお良いです。

スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境にするとともに、風の強い場所では防風垣を設置するなど環境改善に努めましょう。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、葉たばこ販売に向けての出荷規格の確認と、来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 出荷前には、必ず異物・異臭・水分の確認と、土砂付着や腐れ等の手入不足がないか、出荷包の最終確認を行きましょう。あわせて販売見込票を作成して下さい。

また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合はピッキングを行きましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行きましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下がないようにしましょう。

2 良質堆肥10アール当1200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。

また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

3 病害の耕種的防除の徹底を図るためにも夏期耕耘（最低深耕1回・耕耘2回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。

また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行きましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病（穂）	並	上位葉に葉いもちが多く見られる場合、降雨が続くと穂いもちに進展しやすくなります。ほ場の様子をみながら、発生が多い場合は穂揃期における防除を徹底します。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ（秋ウンカ） 斑点米カメムシ類 ※※	並 多	トビイロウンカの発生は平年並の状況ですが、9月の気温が高くと、増殖率が高くなることがあるので、ほ場での発生状況に注意します。 斑点米カメムシの発生が、平年より多い状況です。被害をうけると等級低下につながりますので、穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底し、発生が高密度の場合はさらに追加防除を行います。
大豆及び野菜類	ハモンヨトウ カガコガ オオカガ	並 やや多 並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫（アブラムシ類、アザミウマ類、カガコナジラミ類等）	—	アブラムシ類やアザミウマ類およびカガコナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫に対して、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用など、総合的な防除対策に努め徹底防除します。
	キュウ黄化えそ病（MYSV）	—	本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株（半径3ポット）も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみ定植します。
さといも	疫病	—	台風通過や豪雨の後に、発病が拡がりやすいため、今後の気象に留意しながら、登録薬剤による適期防除に努めます。
サツマイモ	基腐病	—	発病した残渣は、次年度の伝染源となるため、収穫後の残渣をほ場や周辺に残さないようにしましょう。
果樹全般	チャハネカメムシ ※ ツヤカメムシ ※	やや多 やや少	果樹カメムシ類の発生量が多く、また果樹園への飛来時期も昨年より早くなることが予想されています。園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病 かいよう病	並 並	いずれの病害についても、降雨が続く場合は、雨間を利用して、防除適期を逸しないよう散布します。
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	ミカンハダニは、寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病	並	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。 輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	輪斑病	やや少	
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノボカ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメコバエ クワシカガラムシ	やや多 並 並 並 やや多 やや多 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノミドリヒメコバエ、チャノキイロアザミウマの発生が多くなっています。チャノキイロアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。チャノミドリヒメコバエとチャノキイロアザミウマは同時防除が可能です。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。※※は注意報、※は防除情報を発表しています。詳しくはホームページをご覧ください。
2) 病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

